

X-55

1335

上帝論

平岡希久著

東京

警醒社書店

020745-000-8

特52-528

上帝論

平岡 希久/著

M26

ABI-0565



上帝論

目錄

上帝論緒言……………十三頁

第一節 神の定義……………十六頁

第二節 神の存在の思想……………十九頁

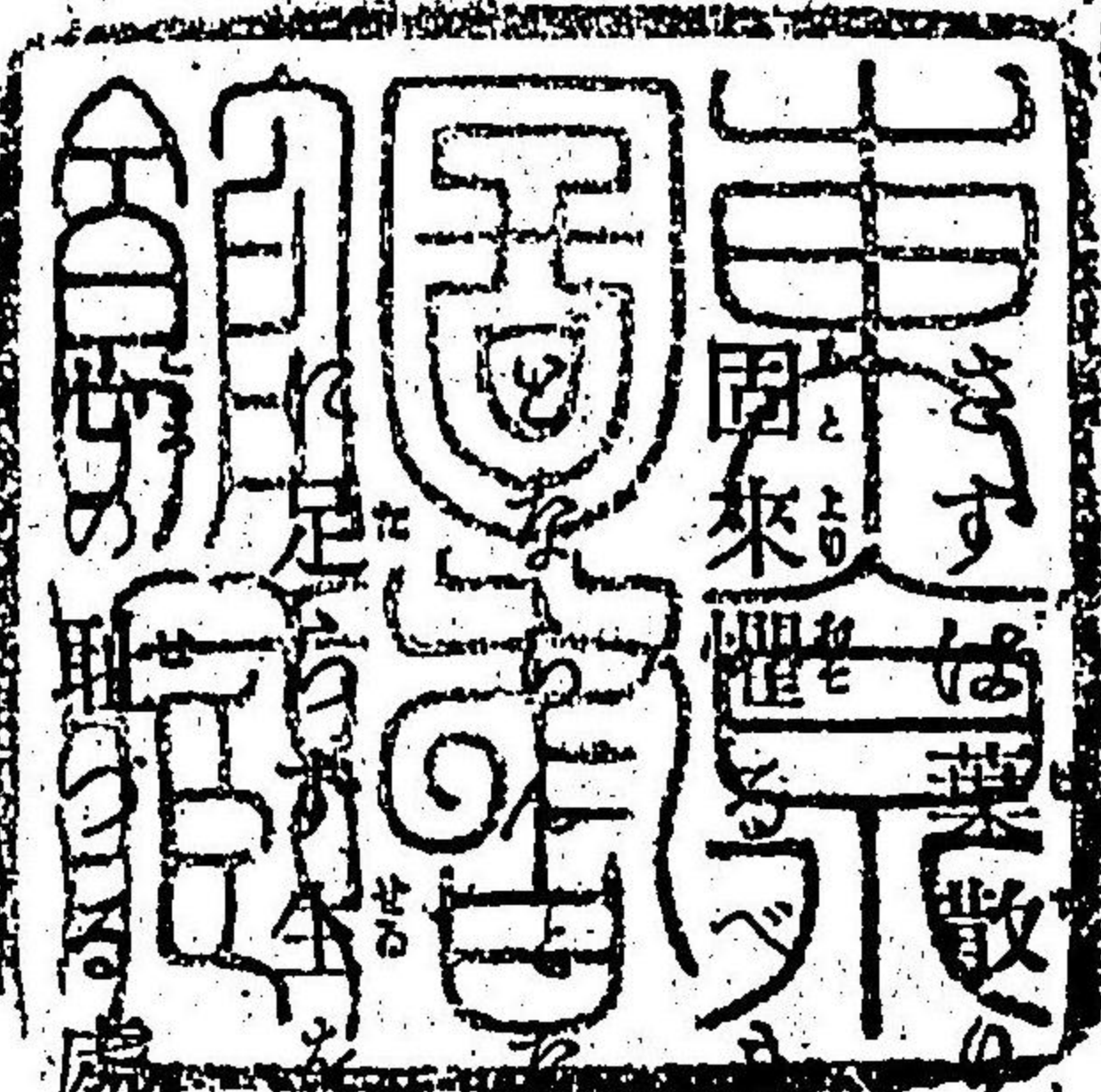
第三節 神の性徳……………三十三頁

第四節 世人の妄議……………三十七頁

第五節 雜說……………四十三頁

第六節 結末……………四十七頁

特 52
528



基督教解疑篇著述に就て愚意を序

昨春病に侵されて以來、養療怠るに非さ、
 えて尙愈はず、私に思ふ、露命期すべからず、
 花落て、悔の回すべからざる事あらん、死



處にあらす、懼るべきは生きて無益の奴
 り、負ふ處は泰山に餘あり、盡す處は一毛
 貪り安を偷むは願にあらす、榮譽驕傲は
 我が朝夕に祈願して止ざるものは、草の

如く木の如く其分を果さんとなり、義を盡し分を果す
 を得ば、朝露々々我何をか惜まん、義を思へば短し人

生五十年、分を考ふれば重し人身五有尺。

今年病を養ひて閑地に遊び、一身を追望して情更に痛む筆を借り文に托して義を果さんと欲す秃筆拙想世を益するや不や、旅窓孤燈考書に乏しく、考證不足意を満し難し、遺憾爰に存すると雖も、腦を撃て得る處あらず然れども獨慰む露滴人を益するあらは我は無益の奴とはなるまじと。

予性大に漫遊を好み、學業の餘暇常に東西を漂遊し、異聞奇觀を尋ねて想を磨し、村童野翁と欺語して情を研き、古を問ひ今を談じ、普く探訪研究し、或は農夫となり

て芝草の上に談じ、或は商人となりて市塵の間に語り、樵夫と伴て山林に談じ、又寺僧と坐して由來を語る、逢處の人は悉く我が師として其特卓の見を聽く、樂哉、々々、天下の物、有生無生の差別なく我が師となり、友となりて、我に教る實に多し、而して我が修習せし諸感情の中に就て、殊に宗教上の觀察は予をして喟然として、大悟せしめしもの甚た衆かりし、宗教と日本國家及國民の關係は實に緻密のものにして、一切の事宗教の感化を受け關係を有せざるものなし、誰か謂ふ日本人は宗教に冷淡かりと、之れ日本人の真相を知らざるもの、

言なり、當今に於てこそ宗教の勢力一掃し去られたれども、佛教傳來以來、最澄、空海、行基、道元、親鸞、日蓮等の高智識勃起して、日本國は一個の佛殿となり、左ながら天然固有の宗教國の觀あり、名山勝地悉く佛門に包まれ、巧機妙工一として宗教化されざるはなし、人情風俗、言語、道德、皆是宗教の流なり、日本國は天然佳絶の風景を刻み、神の美術を顯はして、宗教の神髓を藏め、人は温暖の氣、優美の風に養はれて、温厚、優美、宗教の真相に近し、故に看よ、宗教の殿堂は金彫、銀鏤、宏大、雄絶、數十万字、八方に洽く、佛教大成せられ、佛理新創せられ、高妙の智識

研究せられ、保存せられたり、天正の項、耶穌教傳來するや、三十年に滿たすして、數十萬の信徒ありたり、民の徳に厚く、信に堅く、眞理を愛する知るべきなり、基督教の發達、豈難事ならんや、日本人若し能く實相を開て眞理を仰ぐ心を發せば、滔々として眞理に歸するや、知るべきなり。

維新以來、宗教の勢力大に衰へ、上下道を破り、義を失ふて、我儘のみ増長し、吹く風に草は靡き、利のある處に人は迷ふ、危機岸に臨む、救濟の道夫れ急がざるべけんや、基督教の談せざるべからざる場合迫れるなり、基督教

傳來の歴史は僅に三十年のみ、僅々の日月を以ては長足の進歩をなせりと云ふべきも、吾人は尙一層の奮發を以て勇進せざるべからざるあり、最澄の天台を立つる、空海の眞言を開く、或は親鸞の眞宗、日蓮の日蓮宗を創立するの勞苦と艱難と忍耐と奮勵とは、到底吾人の及ぶべき處にあらず、膽を嘗め薪に臥する素より其分なり、基督曰く身を殺して魂を殺す克はざるものを懼るゝと勿れど、保羅曰く基督の愛我を勵せり、我儕若し心狂るならば是神のためなり、基督の愛より我を絶らせん者は誰ぞや、患難なるか、困苦か、迫害か、飢饉か、裸體

か、危険か、刀劍なる乎、然とも我儕を愛める者に頼りずべて此等の事に勝得て餘ありと、吾人基督の愛を受るもの、豈徒に妻女を慰め、自身の安逸を偷んで傲るべけんや、又何とてか名譽の奴となりて驕傲なるべけんや。予都鄙を漂遊して上根下根の基督教に對する感情、思念の一般を察知し、私に悟る處あり、教育の道行き届き、智識開進せしが如くなるも、理に通じ道に達するものは四千万中万分の一のみ、一般の智識に至りては實に下劣なるを憐まざるを得ず、殊に宗教又基督教に對する一般の智識に至りては幼稚と云ふべきか、迷妄と云

ふべきか怪疑妄誕の中に沈めて一の眞理をも承知せざるなり、豈痛嘆すべき極ならざらんや、一般の智識斯く劣等なるに拘はらず、一方には歐洲新知識を借りて附會の虚疑を逞ふするものから眞理愈掩はれ人道益匿る、是時に當り國を愛し人を愛するの吾人は果して何をなすべきぞ。

今日に於て基督教傳道の機關は略整備せり、蛇の如く狡く着々其歩を進めつゝあれば、早晚眞理の光明四空に燦然たるなるべしと思はる、然れども邪曲曖昧の途に出でざる以上は、吾人神によりて福音を傳播するを

急ぐべきは任務たるなり、教會あり、學校あり、病院あり、救助會あり、矯風會あり、新聞あり、雜誌あり、書籍ありと雖も、擴布の路に於て妨げらるゝもの少からず、教師あり、牧師あり、傳道者あり、信徒あり、醫師あり、文學者ありと雖も、其數僅々到底都鄙に洽なく及び難し、故に怨むらくは基督教思想をして全般に及ぼしむるを能はざるなり、基督教思想を全般に布行するには、適當なる小冊を廣く頒布するに如かじと予は思惟したり。都會の傳道は好機會を多く有すると雖も、村野に至ては殆んど其の機關あきなり、牧師あるの地と雖も、牧師

の一身を以て万機に應ずること克はず、真理の響を以て衆耳に及ぼしむると克はず、閭巷に満てる迷妄怪疑遂に掃ふと克はざるなり。我深く之を悲しみ常に思ふ、田舎に牧師たるの人は万端に應涉して、精盡き神衰へ遂に光を抱て退くとあるべし而して其勞の幾分を分勞し、其事業の一分を助くべき事業は小冊子を以て助くるにありと、是を以て予は自の愚を忘れ、愛に勵まされて此に小冊を刊行す、適當せるや否や自信は他を證せざれども、四方の諸公子請ふ予の志を憐み、頒布の道を計り、真理の光を千万蒼

十

生に及ぼしむるを力められよ、我も亦奮勵此事に當りて屈せざるべし。

今著はす處題して基督教解疑篇と云ふ、予は而後續々上版以て世に頒つべし

明治二十五年十月駿陽清見瀉の客舎に於て

病客 平岡 希久 誌

基督教難解篇

上帝論

基督教の教理を明瞭にするには、第一吾人は神の存在を確信し、神の性徳を知識せざるべからぬとなり。何となれば基督教は神ありと先天的に承認して、其教理を演繹布衍するものなればなり。若し吾人にして神の存在を否認する以上は、百の證明を擧げ、萬の辨論を費すども、到底基督教理を認諾する克はざるへし、基督教の本尊たるキリストは勿論、預言、奇跡、未來の事柄、一として解得すると克はざるなり。之れ論理上の斷案歸結なるのみならず事實上實際に然りとす。故に予は爰に上帝論を草して神の存在を知らざるもの、神の存在を疑ふもの、神の存在を否認するものに向て、神の存

在を證明し、及び其性徳を概説し、以て基督教理の本源を立
證することあらんと欲す。

元來神の存在を承認するは、左まで六ヶ敗事にはあらざり
しが、近來學術進歩の傾向より、理學者哲學者は種々の學說
を提出し、六ヶ敗論するを以て、有神論は哲學上の難義と
なり、容易に解明しがたき議論となりて、愈凡人には縁故遠
きこととなりぬ、元來六ヶ敗なきものを六ヶ敗されて、六ヶ敗
脱かねば義理通せぬ次第となりしは、予の深く遺憾とする
處なり。

故に是より説明せんとするに當りて、予は非常の困難に取
り巻かれたり、予の目的は平易簡明万人に了解され得る道
にあり、然るに今日有神論に用ゐらるゝ語の多くは、哲學上
の語、神學上の語なれば、通常世人には目慣れぬ難字のみ、且
つ其議論も形而上に多きとなれば、之を平易簡明に説明す
ることの困難あるのみならず、假令此困難に打勝て説明し
畢るとするも、之にては盡さざる處多かるべしと思慮する
なり。

今有神論と言へば簡單なるに似たれども、千年以往哲學上
の問題として、承認せられ、否認せられ、駁撃せられ、辨解せら
れたるとなれば、決して簡單なるものにあらず、殊に十九世
紀の後半に至りては、科學の進歩に伴はれて、有神論も大に
論據を動かさし、萬雷非難の中點に立て、遂に眞理を保存した
る大激戦の後なれば、其議論紛々雑々實に磯の小石の如し、
其衝突を擧げ、防禦を記し、反響を録しなば、有神論程、宏大の

議論あらざるべく、凡う今日の問題中にて、最も長き歴史を有し、最も多き議論を包み、最も廣き區域に跨りたるものは有神論なれば、平易簡明に小冊子中に記述するとは到底望むべからぬ難事なりと謂ふべし。

故に予は今や此冊子に期す、自己の經驗を基とし、確信を礎とし、成るべく、狭く、容易く、短く、其要を掬みて論を終はるべし、然れども予は他日を待て、廣く有神諸論を蒐集し、其駁論を精確にし、一大歴史を編せんことを期す、

第一節 神の定義

爰に一言すべきは、神なるもの、定義なり、神に就ける思想を明かにするは第一の要件たるなり、日本の古代には神代なるものあれど、之れ決して吾人の稱する神にはあらず、新

井白石は断じて神とは人の事なりと云へり、之れ勿論なり、神代の名字は日本書記に始めて見ゆるとにて、古事記には未だ見えざるなり、日本人の神は蓋し其人より化したるものにして、儒學の鬼神、佛學の佛等と、化合して生ぜし思想なり、然れども此等の思想は吾人の稱する神を言ひ顯はすに足らざるなり、英語の「ゴッド」(GOD)譯して神とせしは、適當の文字なきためなりと雖ども、譯字に由て眞意を埋没し去らしむるは嘆すべきことなり、予は題して上帝とせしも未だ好文字にあらず故に吾人は宜しく文字に拘泥せずして、神なるもの、思想を認得せざるべからず、吾人の稱して神と呼ぶ處のものは、第一宇宙の創造者なり、第二萬物の撫理者なり、第三徳義の主宰者なり、其体は第一

靈^レ體^ニにして看^ルるべからず、第二無限にして永遠無窮なり、第
 三唯一にして數多ならず、第四無變にして増減變化あると
 なし、又其性徳は第一全能にして能はざるなく、第二全智に
 して知らざるなく、第三遍在にして在ざるなく、第四完全に
 して欠くるなく、第五自存にして他に頼るとなく、第六自由
 にして束縛せられず、第七善美にして濁る處なく、第八仁愛
 にして普く救護し、第九端嚴にして賞罰明白なり、第十至聖
 にして潔白なり、此等の體性能力あるものを指して神と呼
 ぶなり、

然れども吾人の知る處の神は、吾人に顯はれたる部分より
 知るものなれば、未だ以て神なるもの、全體を知りたりと
 は云ふべからず、宇宙に現はれたる一部分の性徳を知るの

み、基督教の神と稱するもの又極て一部分なり、故に予は敢
 て愛に神の全體を悉せりとは信せざるなり、又今より證論
 する神なるものも宇宙に顯はれたる一小部分のみ、其全體
 に至りては未だ知るべからず。

第二節 神の存在の思想

神の存在を承認する吾人の思想を序述して以て有神證論
 となさん、此等の條項に關しては世上議論のあるありと雖
 ども之を反覆丁寧すると克はざるは、序述の簡單を主とす
 るを以てなり、又序述の條項敢て思想の前後を正さず乞ふ
 諒せよ。

第一 宇宙万物より創造者の思想

吾人を始め吾人の周圍を取巻く萬物、遠きは極目數へ難き

日月星辰、近くは足踏み身横はる山川海陸、如何にして出現し、如何にして存在するや、突忽として出現したるもの乎、偶然にして成立せしもの乎、或は無始無終のものなる乎、道理なくして突忽出現するとはあるべからざるとなり、一物の現在するには現出する道理あるなり、郊野に一夜にして石碑現出す、之れ突忽のとあれども、天より落つるか、地より出るか、他より運びしかの三理に付て研究すれば出現の理由、分明ならん。天地萬有の突忽出現するも然り、或は無始無終測度すべからずとなす乎、左る説は無道理なり、生物は死滅し、地球の連動も、發育も有限のものなり、終末あると明かなり、終末あるもの其の首始あらざらん耶。今日の學說は多く物質勢力の二元、宇宙にありて抱合化合

の作用を経て遂に種々の物体となり、人間草木も生ずるに至れりと進化説を推し上せて元素にまで及び遂に偶然出現論の如きものを信すれども、偶然化合成物の議論は信すべらかぬとなり、偶然に成立ち、偶然に破滅す、偶然の物に如何で必然の人間意識の如きもの存するや、予は其成立にも、破滅にも、一大元理ありて造物者の胸算運用によるものなるべしと信す。

第二節

動体より起動者の思想
 静は物の常体なり、動は物の變體なり、動くものは動りされ
 て動くなり、而して動くものは常に静に復らんとするの趣
 あり、地球の如き、星辰の如き、絶へず運轉すると雖ども、動体の
 理法に従て、遂に其運動を止むる時あるべし、物質の運動

の如きも永遠のものにあらず、必ず歸結する處あるべきなり。世に光熱の滅する時は動体も亦靜止の体に歸るべし。故に吾人は動体の起原を考究し、他力の爲めに勝起せられたるを思ふと全時に、起動者あるを推測せらるゝなり。

第三節

天地萬物を見るに其秩序の整然たるを驚くばかりなり。星辰運轉曾て其序を失はず、天地萬象措置宜しきを得て、錯雜紛々の中に曾て易ゆへうらざる一條の道あり、人の五官四肢の配置、國の山川草木の配置、巧妙機智悉く宜しきに合はざるか、し、學者曰ふ之れ適種生存の理法による、然れども吾人は適種生存の理法に由て辨明し難きものを、草木動物に見るのみならず吾人の体軀に就て尙見るあるなり、之れ

然し秩序のみならず意匠の巧妙と合せて考ふべし、

第四節

秩序と意匠は離れざるものなり、秩序ある處には必ず意匠あり、意匠とは即ち一個の意見ありて成立せし匠事にして、無意見ならぬと、偶然ならぬとなり。人の口は目と鼻の下にあり、口は全身の養を取る處あり、故に目は遠く近く食すべきものなるや否を定め、鼻は關守役として検査し腐敗物なを捨てしむるなり、之れ秩序整ふなり、而して又意匠あるなり。翼は飛ぶ器械なれば魚にあらすして鳥にあり、足は走るため口は食ふためなり、各其物に相當して長短の不都合なく、存在の便をなす、之れ等の意匠を思ふときは万有は偶然に出してしものにあらずして、十分の設計者あるを知らる

べきなり、道種生存或は自然淘汰の説を取るもの、乞ふ人間男女の二体を取りて始末探究せば思半に過ぐるあらん、

第五 變化より無限者の思想
天地萬有は轉々變化極まりなし、而して變化の理法を考ふるに一定の軌道を通過して終局に近くものなり、變化の極は不變化なり、變化の大初亦不變化なり、變化は不變化の化相なるに過ぎず、故に吾人は變化に對して不變者のあるとを觀念し得るなり。

第五 不完全より完全者の思想
人は自己の不完全を承諾して完全ならんとを欲し、完全に達するの道を追ひ求めつゝあり、而して宇宙には完全なるものあるべきを觀念し、人間進行の極點完全に到達し得べ

しと信するなり、此不完全の觀念は獨孤にして存するものにあらず、完全に對して存するものなれば、宇宙には必ず圓滿至聖の完全者あるべしと推理するなり。

第七 有神觀念の普通より神

多神教にもせよ、凡神教にもせよ、教理典式異別あるにもせよ、如何なる國に在ても、人は必ず至高能者に關する觀念あらざるはなし、之れ萬邦歴史上の事實なり、假令迷妄のもの、誤認のもの多しとするも、其觀念に至ては普及にして、全一にして、更に異なる處あるとなし、進化論者は之を妄味の野蠻人の恐怖心、畏敬心等に歸すと雖も、其觀念の至高者に關する特異の點に至ては未だ承知し克はざるなり、之れ思ふに人心中に存する先天的神の肖像にあらざるなき

乎

第八 智慧より本原者

人に存する智慧及動物に存する本能なる智慧、進歩と不進歩の差別あるにもせよ、是等の識量は物質の有すべきものにあらず、物質を離れて別に智慧は存する能力たるなり、智慧の本源あるにあらずは智慧は物質に存すべからざるなり。

第九 生氣より付與者

動物類に存する生氣なるものは、如何にして存在し得るや、發達繁茂して外力に抗抵し以て生存す、此生氣に至ては吾人解剖するも分拆するも更に探り知ると能はざるなり抑も學說に曰ふ勢力とは如何なるものなるべきや此不可

思の能力あるべきものなる乎、予は生氣は則ち生氣の大王より付與せられたるを信ず、予は到底物質と勢力は偶然化合の作用を以て、非生物となり生物となり、又生物中に數百千万の種別を作すものなるやを覺ると能はず。

第十 道義より主宰者

人間に存する道義の觀念は、進化論者の言ふ如く自利利己、自愛等の我的原性が他利、他愛の思想を起さしめしものなるべきや、案ずるに道義の物件は明かに習慣により教育により、自利によりて、進化し成立しものありと雖も道義の觀念則ち普及なる、全一なる觀念が悉く自利、自愛の精神より、語を換て曰はい、適種生存の理法より、湧き出てたるものとは思はれず、進化論の道義は望酬的の道義なり、然れども

古今東西傳來の道義性質は報酬を欲望するにあらず中心に屬せられて我が善とする處之を他人に行ふなり右手のなす處之を左手に知らしむる勿れ我が欲する處之を人に施せ汝の敵を愛めよと吾人の知る處の道義は愛に生ず涙に起る何とてか自利の欲心あらんや是等の情は其れ如何にして人に存する乎子思の所謂る天の命する處ならざらんや先天的の性情なり。

第十一 道徳界の審判者

人若し物理の法に反して行爲せば害を目前に受け法律の則に背て行爲せば罰を瞬時に看る例へは火中に立て焦ざらんと欲すと雖とも忽ち焦死し他人の財寶を盜奪すれば監窓に繋がるが如し然れども道徳の法規に反して更に責

罰なしとは無法ならずや物理の法法律の則は吾人の身体を束縛するに過ぎず意志の自由は天上天下唯我獨尊なり道徳の法は意志の中におり會て外界に繋がれざるなり誰か之を處理せん今例證を擧げんに一醫あり一婦人の病を診し其非常の盡力を以て之を平愈せしめたり然るに醫師の心中は大恩を被せて奸淫する目的なりとせば如何此惡意志を以て始終事を計り未だ果さずとせば行爲上與賞費すべきものなる乎法律上にて之を責むる理由なし社會に於ても責むる克はざるべし故に此醫は善人として恩人として長く賞せらるべき乎然らは何によりて其の惡意を責めん世人には惡目的を以て善事をなすものあり善目的を以て誤て惡事をなすものあり現象界は之を法律或は社會

の法則に照して責む若し其の現象に由りて之を責めは前者は善人となりて責を免れ、後者は悪人となりて罪せられん、抑も何の曖昧予や、正邪處を易へて賞罰顛倒す、嗚呼何處にか精神を明識し之を處罰する法なからんや、積善の家餘慶ありとか、隱微たるより顯はれざるものなしとは、精神を慰め、善を勵まし惡を戒たるものならん、然れども吾人は之によりて満足する克はず、道德界の大審判者、善惡の宣告者あるを要す、然らざれば人の道德心は恭微して振はざるに至らん。

第十二

人は強勇なるが如くにして極めて弱きものなり、他力に依頼せずして存生すると能はざるものなり、人間の稱する獨

立自治とは絶對的の事情にあらず、或狭き意味にて呼ばはるゝとなり、獸の如く寒を防ぐ毛衣なく、鳥の如く飛び廻る冀なく、根を掘る爪なく、骨を噛む牙なく、到底他力に依頼せざるべからず、野蠻時代は日月山川鳥獸を神として依頼せり、文明時代は蒸氣、電氣、磁氣、器械、鐵、鋼、金、錢を依頼せり、而して物質的のもの遂に人の精神、生命を救ふに足らずして、万人の依頼心は愈無形に走り、遂に自己の心則我なるものを依頼するに至れり、然れども我なるものは到底頼むに足らぬとを知りて、萬人迷ふなり、予は吾人精神の依頼心を満足する大能者あらざるべからざるを推知するなり、拙著大觀中、宗教要論、個人篇、宗教原論、依頼心の部に詳説す

第十三

慰籍心より慰籍者の思想

人間の慰められんとする心は萬人普通なり、蓋し人生露の如く、人世浮雲の如く、火宅煩惱、娑婆穢土、餓鬼道、地獄の如く人情輕薄、何に由て人生を安せん、金錢も安全を買ふに足らず、暖衣飽食尙安然ならざるなり、慾を滿せば慾更に生じ、慾孕んで愛更に來る、物質的の慾望は例令滿つるも、精神を慰むると克はず、花下に歌ひて慰められ、月夜に歩して慰められ、風に雨に又雪に川に海に又山に、慰められて聊の苦を瞬時は忘るゝと雖ども、花落ち月欠けて情痛み、梢紅に頂白くして愁傷更に深し、夫れ何によりて慰藉せらるべき、文明進歩學理開發の世の中は更に吾人をして不安不泰の境界に誘引はしむる傾向あり、吾人は精神を依頼すべき大能者を得て、其の慰藉に逢ふにあらざれば、満足せざるなり。(拙著大

觀宗教要論個人篇宗教原論慰藉心中に詳説)

以上十三の條項は決して予の獨想の論にあらず、基督敎界に於ては使徒師父以來、數多の神學者、哲學者によりて討論せられ、希臘古代哲學、埃及哲學等に於ても論定せられしとあり、殊に千七百年來哲學勃興の時代となりて、多くの有力なる哲學者によりて想定せられたるものにして、予の推理の根元となりしなり、然れども文字簡單に過ぎて多數哲學神學者の議論を載する克はず、又例證を掲げざるため明解し難きあらん、然れども條項中の一件に深思し玉ふならば、腦中の眞影、反映、善美、至聖の神を發見するを得るならんと思ふ。

第三節 神の性徳

以上の所説は神に關する推理又觀念たるに過ぎざれども、此等の推理又觀念を吾人は正確なりとして承認することを得ば神なる觀念は最早觀念に止まらずして、實在者として吾人の心に承認せられざるべからざる道理なり。既に神あるを承認すると雖も、外界及び吾人の心情よりの推測にては、神の本体及び性徳に關して十分なる智識を得べからざるなり、之を主觀的に承認するには必ずや神の「インスピレーション」感通を受けざるべからず、神の「インスピレーション」に成りし聖經に據らざるべからず、此くして得たる「インスピレーション」が、更に吾人の得たる推理を確實にし、客觀より主觀に輸して、手が第一節に掲げたる神の本体及び性徳を知識せしむるに至るなり。

然れども予は今一例を擧げて吾人の推理し得べき限り神の本体及び性徳に關して推理せん。吾人一日散策山に遊び、一堂を發見せしと假想せよ、主人童僕時に不在なりと假想せよ、扱て斯の如くして吾人の第一に思ふべき事は、曰く之れ誰人の棲家ならん、蓋し偶然に存在する理あらざればなり、試みに内に入て様子を見れば客間あり、臥床あり、勝手あり、思ふに之れ一家族の棲家なり、器具其他一族の印あればなり、尙看れば細あり、火鉢あり、襖あり、障子あり、諸室善く法に合ふ、又空氣の流通、光線等に注意至れり、知るべし秩序あり、意匠ある建築なりと、思ふに主人は必ず智能ある人ならん、と、床間には花あり、其他裝置美麗にして潔白なり、知るべし主人は美を好み、潔白を愛する人

なりと、之れ等の推理は何人も爲し得べく而して正確なるなり、吾人は宇宙萬有を以て神の性徳体形を推理するは此類なり、宇宙を造り、萬物の理法を制定し玉ふを見れば、其の大能大智を知るべし、千古の昔時より宇宙の變化あらぬを見れば、神の永存無限不變を知るべく、萬有の一定理に歸して萬古全一なるを見ては、神の唯一の創造攝理者なるを知るべく、天地の秩序意匠美觀に對しては、神の智慧能力美善を愛するを知るべく、宇宙の一切の理法を見ては、遍在完全自存を知るべし。

然れども尙吾人は神の靈体たると、徳義の主宰者たると、至聖、仁愛、端嚴、自由なると等に至ては、神の「インスピレーション」によらずは知るべからざるなり、而して基督敎は此等の

性徳に關して専ら教ふる處のものなり。

然れども以上の事柄にして畧了解せられしならば、神なるものゝ概念は最早吾人の胸中に存するなり、神は萬物を創造して之を攝理し、之を主宰するものなることを知らば、吾人も之に創造され、攝理され、主配されて、日々其恩澤に沐浴しつゝあるを知るべく、既に之を知らば父として、母として、恩愛の感謝をなし、孝貞の道を盡さざるべからざるなり、(後節に譲る)

第四節 世人の妄議

世人妄議して曰く神宇宙に存在するものならば、之を我に示せ、我之を信せんと、之れ妄語なり、神は靈体なり、目にて見るべきものにあらず、只た信仰の目に由りて之を看、信仰の

手によりて之に觸るべきのみ、松の葉末の露散らすとも、梅の梢の花飛ばすとも、人は尙風あるを知るにあらずや、曾て見ず曾て觸れずと雖も、人は尙我魂あるを信するにあらずや、神の形体見るべからず、觸しとなきも、現存せる萬有に
 より、理法によりて、之を知ると能はざらんや、神を宇宙の大靈魂と見做して思考せよ、宇宙に一大生氣ありて運轉する
 と思考せよ、思半に過ぐるあらん。
 愛に又妄信あり、多神教之れなり、地、水、火、風、山、川、草木、一切を
 崇拜し冥福を祈る之れなり。多神教は人心に固有せる依頼
 心慰籍心等の據る處を失ふて迷に陥りしものにて、人智の
 開發せざる時代には何處にも勢力ありしものなり、然れど
 も智識の進達するに隨て、其影を失しぬ、地、水、火、風、固來之生

命あるにあらす、大能あるにあらす、冥福を祈るべき價值な
 きなり、故に希臘の多神教時代にありて、ソクラテス、プレト
 ー等は一神説を考定し、孔子は天を信じ、老子は道を説き、釋
 子は因果を談ず、釋子の説は凡神教にして多神教の基たり
 しと雖も、孔老以上は其觀念一神にありしや知るべきな
 り、然るに世の學智の進歩して鬼神説、多神教の妄迷信ずべ
 かららざるを見るや、幽霊鬼神妖怪を追拂ひ、石佛金尊偶像
 を打毀つと共に、疾走して一極端に走り、一神教理をも、曖昧
 時代のものとなし、無神論を提出するに至りたるは、坊主嫌
 ふて袈裟まで嫌ひたる感情的の趨勢なり、予は多神教を妄
 信なりと駁撃すると雖も、多神教の觀念は一神教の觀念
 を證するを知るなり、一突飛無神論に陥るは事實も觀念も

取除けたる話にして、行き過ぎたるの感なき克はず、故に見
 無神論は物質を以て本体となさんとしたれどもならず
 理法を以て説明せんと欲したれどもならず、一は後戻りし
 て凡神論の形体をなして迷ひ、一は不可思議論に放任して
 惑ひ、共に守るべき地位を得ざるにわらずや、多神教の如き
 は到底今日に於て信すべきとにわらず、日本人の尙多神教
 に迷ふは憐むべきとなり。

次に學理の進歩したる世にあつては凡神教の傾向あり、凡
 神教とは宇宙萬物悉皆自体是神なりと云ふ主義にして、神
 は吾人を離して存在するものにあらず、神は吾人の中にあ
 り吾人は神の一部なり、佛教にて佛及衆生一而不二乃至衆
 生即涅槃相と仁王經に説き、又一切衆生有佛性と法數經に

説きたるは萬有神教主義にして、其原因を考ふるに、多神教
 は不稽にして信すべからず、去ればとて有神の觀念を捨つ
 べからず、有神の觀念を存するも神を認識すると克はず、神
 なき乎萬物の進化造工を説明する克はず、是に於て萬有即
 神の説となりたるなり、然れども之れ宇宙及吾人を誤解し
 たる甚しきものにて、結局多神教の基となるものなり。
 又不可思議論とは多神教を嫌厭するの極、一神教をも退け
 て無神論となり、物質や勢力を以て宇宙萬物を説明せんと
 計りたれども、其物質勢力は如何なる理法順序によりて、斯
 く造工をなし、變化をなし、定理の下に宇宙を運轉するや、萬
 物の理法を以て推すべからず、吾人の心識を以て知るべか
 らず、吾人萬有より得たる知識にては到底思議すべからぬ

となりとの結断を以て不可思議論となりたれども、之れ餘り理論に拘泥したるなり、決して一神論を推理を別にせざるなり、一神論を破却するものにあらざるなり、只た之れ「インスピレーション」なき有神論あり、若しも百尺竿頭一步を轉せば大悟するとあるべきなり。

扱て此外神に對する難題少からず、曰く神は何故に好都合に世界萬物及人間を造らざりし乎、世界には無益なるもの多きにあらずやと、此等の事は兒童の父母に語る難題に過ぎざれども、世間此種の人多きを如何にせん、破邪活論てふ大卷を讀めば學者にも似合はぬ説を包まれつゝあり、予は一々之に應答すると克はす然れども一二の問題に就て簡單に辨せん、以上の難題に就ては一、神の攝理の聖旨は知る

べからざるとなれば、其目的を知らず神を難すべからず。二、神は常に人類の好都合のみを圖られたるにあらず、萬物の益を計り玉ふを以て、獨り人より難すべからず、三、今日無益と見ゆるもの明日の益となるとあり、時と時の知識のみにて難すべからずと、此答にて足れりと信ず。

難者曰く神は端嚴にして賞罰分明ならば、何る惡を亡ぼし、善を揚げ、現在に於て罰し玉はざるや、若し神の正義を以て罪を目前に責め玉はば、世に惡はなかるべきに也。予は此疑問には神と人と罪の論中に答ふる意見なれば、重複するを恐れて略す。

第五節 雜説

難者の難問も未だ盡きざるべく、識者の議論も未だ完から

ざるべく、予の謂ふべきとも未だ盡さざれども、有神の事則
神の存在に付ては議論を茲に結び、今聊か予が後章に説く
處に關して黙すべからざるものを注意して此章を終らんと
欲す。

一、聖書に於ける神

聖書にては神を呼ぶにエロヒム及びエホバとせりエロヒ
ムとは複數の語にして天地創造の時多く用ゐられたる語
なり、此語は神の唯一にして聖靈及基督等の三位あるを
示せるものなり、又エホバとは絶對無限自存の本性を顯は
す語なり、聖書には默示契約の時に用られ、人世に直接關係
を示されたる語なりし。

二、神は全智遍在の神なり

吾人は有神なることを承認したるからは、無限不變自存創造
等のみの神となすべからず、天地の主宰、吾人をも支配し玉
ふを知るべし、又其性徳遍在全智にして吾人の身体髮膚は
勿論、心の有様まで明かに知り玉ふとを承知せざるべから
ず、(馬太傳十(六)章(八)節(世記二十)使徒行傳十(二)章(九)節)神は吾人が見ざる處知ら
ざる處をも預め知り玉ふなり、(以賽亞書四(九)章(九)節)故に吾人心を欺さ
ず、(加拉太書(七)章(七)節)神を詐りて、不正を庇はんとするは無益なり、(六)章(七)節

三、神は正善愛の神なり

吾人は神を正善愛の神なりと知るは、最も必要なるとし
て最も有益なるとなり、神は宇宙萬物を創造して、攝理の大
法則を立て、之を主宰し玉へり、又人には良心を付與し道
徳を以て生存繁榮の道を立てしめ、兼て神と人との通路と

なじ、人が此道を正善美に行ふに由りて、神の恵を得べきも
のどせられたり、神は正義を以て天地の理法を立て、善によ
りて導き、愛によりて守り玉ふなり、不正不善不愛は神の悪
み玉ふ處あり。

四、神は絶えず吾人を看る
神は創造して攝理法を立て、宇宙の外に閑居して傍觀し玉
ふ。神にあらす、恰も園丁の如く日々刻々、園内を巡視して曲
れるを矯め、乾きたるに注ぎ、以て愛護し玉ふなり、神は吾人
の善悪を檢視し、善を賞し、悪を惡み玉ふなり、神は吾人に感
通を與へ、又默示を與へ、以て勸善懲惡をなし得るの神なり、
神は吾人を恵み、吾人を慰め、吾人を助け、吾人を勵まし、吾人
を恐はしめ、吾人に報ゆるの神なり。

五、吾人の神に對する意志
如斯く吾人は神に造られ、神に養はれ、神に守られたり、加ふる
に恵を與へ、慰めを與へ、助を與ひ玉ふべき神なるを以て、吾
人は昔日の迷を去り、雲を拂ひ、霞を除けて、全心を擧げて讚
美し、全心を擧げて祈念し、全心を擧げて奮進し、善を勵み、道
を正し、義によりて邪を退す、以て神を悦ばしむべきなり
然れば神は大能の慰藉者となりて安全福樂に導くべきな
り。

第六節 結末

始めに謝言せし如く、思はず筆端六ヶ敷文字を並ぶるとど
なり、衆覽には如何あらんと氣支ひぬ、然れども六ヶ敷議論
も略して成るべく容易に勉めたる心得なれば、讀者乞ふ責

ひる勿れ、此章に盡さぬ幾分は後章なる神と人と罪の問題
中に論せし處あれば就て看られよ。

冊子の後に附言す

一、此冊子を読みて抱懐せられし迷疑の一端を開かれし
讀者は、片紙を以て生に告げ玉は、生の病間の慰め悦
び如何ばかりならん、生長く記して忘れず。

一、此等冊子中にて未だ讀者を満足せしめざるものあら
ば、遠慮なく尊翰もて質疑せられよ、予は好便を求めて
出來得べき限り答辯すべし

一、此等冊子中に書き足らぬ處論じ盡さぬ處ありと思召
の讀者は、注意を惜しむ勿れ、予は喜んで訂正増補し、第
二版に完成すべし

一、予は此等六冊を以て解疑篇の一片となし、進て筆を取
る思考なるも大方の諸氏請ふ真理を愛するものは、進

て如何なる事情が顕となり居るや、辯すべきものあら
ば之を教示せられよ、大小の事泄らすとなく解疑する
は解疑者の任なり、又幸に草稿あらば送付し玉はれ、好
便を以て發行公布するを悦ぶ、

明治二十五年十二月廿七日印刷
明治二十六年一月四日出版

定價金五錢

著述者

静岡縣庵原郡興津町三十六番地寄留
山形縣士族

平岡希久

印刷者

東京市京橋區瀧山町七番地汽關舎

澁谷信次郎

發行所

東京市京橋區出雲町壹番地

警醒社書店

大阪市西區土佐堀三丁目三十八番地

大賣捌所

福音社

大觀個人篇	平岡希久著	定價八錢
處女の懷妊	全	全五錢
背叛の理解	全	全五錢
不可思議の理證	全	全五錢
耶穌の磔刑	全	全五錢
上帝論	全	全五錢
神と人と罪と救	全	全五錢
大觀社會篇	全	近刻
日本新婦人策上卷	全	近刻
日本新婦人策中卷	全	近刻